

## 歴女 芳子の変身

小道 周帆

大島芳子が所属している大学の「歴女サークル」で、NHK大河ドラマのビデオを順番に観ている。先日は2016年に放映された『真田丸』であった。「なんとといっても三谷幸喜の脚本が判りやすく出来ているわ」

「確かに面白いけれど、史実でないようなエピソードが少し気になるわ。例えば木村佳乃の演ずる信繁の姉「松」が崖から転落して記憶喪失になり、出雲阿国舞踏団にいたなんて・・・」

「私は草刈正雄の扮する真田昌幸が好きよ。現代の男性には見られない戦術に長けた闘争心がいい。あんな上司だといいなって思っちゃうの」

「さて、いよいよクライマックスの関ヶ原の戦いになるわね。小早川秀秋の裏切りを端緒に決戦は僅かの間に関ヶ原に決着してしまうけれど、各々の大名をどう描くか楽しみだわ」

「そこで提案。今年の歴史勉強旅行は関ヶ原にしたいの。どう？」

「賛成。関ヶ原は都市化とも無縁で、昔の合戦の地形が残っているそうよ」  
「じゃ、レンタカーを借りて、それぞれの大名の陣地を訪ねてみたいわね」

この後は日程やそれぞれの担当する大名や役割等を決めた。特に歴女に人気のある石田三成、大谷吉継、宇喜多秀家、真田幸村は抽選となった。敗軍の将に人気があるのは、このサークルが悲劇の人物である沖田総司ファンが多いからかもしれない。裏切り者の小早川秀秋と勝者となる徳川家康はジャンケンで負けた人が嫌々引き受けた。

大島芳子が歴史に関心を持ったのは歴史漫画を読み始めた中学生の頃からだ。何といても『風光る』（渡辺多恵子）の大ファンだ。主人公富永セイは父と兄を殺した長州勤皇派に仇を討とうと「壬生浪士隊」の入隊試験を受けた。名前を神谷清三郎にし、性別も男と偽った。無事入隊を許可され、我らの愛する沖田総司の部下となり、男社会に戸惑いながらも数々の事件に関わるというストーリーなのだ。今年も第三十八巻が発売されており、シリーズ計六百万部突破の大ヒット作品になっている。

その他にも新選組を扱った人気漫画には『無頼 魔都覚醒』（岩崎陽子）や乙女ゲームの『薄桜鬼』がある。いずれにも沖田総司が出てくる。美男子で結核を患いながら生きる沖田総司の堪らない魅力が心行くまで堪能できる。

ただ、大学生になってからの大島芳子は、徳川慶喜の生き方に興味を持った。徳川十五代最後の将軍、在任期間十一ヶ月の慶喜は尊王攘夷論の水戸斉昭の七

男として生まれ、幼少の頃から極めて聡明な子と言われていた。跡継ぎのいない三卿のひとつ一橋家に養子となった。それがためにこの後の慶喜の波乱万丈の生涯は、芳子の研究心をくすぐってくれる。

歴女であるからには、慶喜様の墓参りからと谷中の墓地を訪ねた。徳川家の菩提寺といえば増上寺と寛永寺なのに、なぜ庶民と同じ谷中なのか不思議な気がした。どうやら慶喜は大政奉還をしたことで將軍として死ぬことができなかったため、將軍徳川家の菩提寺に断られたのか、あるいは自らが入ろうとしなかったのかも知れない。

慶喜の墓を訪れる人は多いようで、あちらこちらに案内板があり、やがて石壁に囲まれた大きな墓地が出てくる。正面は鉄格子で、中を見渡せる。門扉には燦然と三つ葉葵の紋が輝いている。案内によれば慶喜公はじめ縁者の墓所だとある。正面の円墳状の墓は慶喜。その右側は慶喜公の正室徳川美賀子の墓。ここまでは判るがそれ以外にもいくつかの墓がある。慶喜の墓の後ろに二つの墓が仲良く並んでいる。右の墓標には新村信子、左は中根幸子とある。

この二人は慶喜の側室で、駿府時代に慶喜の子を二人合わせて、早世の子も含め二十一人も産んでいる。その子の母はいずれも正室の美賀子とされていた。さらにもうひとつ、徳川家之墓とある後ろにも墓がある。墓標には一色寿賀の墓とある。死して須賀から寿賀と目度い字に改名され、その働きを評価されたのだ。この須賀は女中頭として、生涯に亘り徳川家を支え、家政を取り仕切った人物だ。若い頃には慶喜が初めてお手付きをした女性といわれている。

芳子は妻妾が同じ墓地に埋葬されていることに俄然興味を持った。カメラや自転車といった新しい物を好んだ慶喜とは聞いているが、家庭生活も従来の大奥中心とは違ったものだったのだろうか。調べてみようと思った。

\*

\*

\*

大島芳子が、ふと気が付くと、全く見覚えのない所にいた。どこかの御屋敷のようだ。周りを見渡すと、時代劇映画のセットのような感じがする。いやいやセットではなく、本物だ。

「大島芳子さん、こんにちは。あなたは今日から大島芳子ではなく、私、新門辰五郎の娘 お芳なのよ。そのつもりでね」

「いやよ、戻してよ」

「ダメ、ダメ。これからは江戸時代を体験できるのだから、大いに楽しめるわ。話し方も身振りも、江戸の町娘お芳になるんだからね。ほれほれ、女中頭

のお須賀さんが向こうから来るよ。よろしくネ。隣はお父っあんの辰五郎だからね」

「辰五郎さん、娘さんを連れてきてくれたのね」

「へい、これが娘のお芳です。コラッ、挨拶するんだ」

「あたいはお父っあんの子なもんで行儀が悪いんで：すいません」

「だから、一橋さんの所で行儀見習いをさせて貰うとお願いに来たんじゃないか」

由緒ある一橋家と火消し『を組』の頭である新門辰五郎とは奇妙な関係であるが、それには政局に絡んだ次のような背景があった。

十三代將軍家定は病弱で、子どもがいなかったため跡継ぎ問題が起きていた。次の將軍は紀州藩主の家茂か一橋家の慶喜かで、南紀派と一橋派に分れての争いであった。そんな争いの最中にアメリカ総領事ハリスが通商条約の締結を強烈に要求してきていた。開明派は新しい時代に対応できる有能な人物として、二十歳の一橋慶喜を推していたが、親藩・旗本を中心に徳川の血統の濃さから、十一歳とはいえ紀州藩主徳川家茂が正統だとして、政局は紛糾していた。

そんな大事な折に、老中阿部正弘が急死してしまった。阿部のやり方に批判的であった井伊直弼が大老になり、議論することなく一挙に十四代將軍は家茂だと決定した。その後は安政の大獄による厳しい取り締まりを行い、慶喜までも謹慎を命ぜられた。

こうした争いの中で、一橋家は江戸城内にあるとはいえ物騒な世だけに、暴漢に襲われないとも限らない。しかし三卿とはいえ、藩主でないため藩士もおらず、一橋家で抱えている用人と幕府からの出向者だけの守衛は無理があった。そこで浅草寺の関係者を通じて、町火消しの頭であり、粋で、強くて気風のいい江戸一番の侠客でもある新門辰五郎を紹介された。これ以降、一橋家は新門辰五郎一家に守衛・火回りの役を任せていた。

お須賀は人づてに辰五郎の娘が街中ではピカ一の美人だとの評判を聞き付け、正室の美賀子様と上手くいっていない慶喜様のお相手にはどうかと考えた。「辰五郎さんよ、お芳さんは噂通りの美人だね」

「へえ、母親が吉原一の芸妓でして、ついつい孕ませてしまったもんで：」

「ホント、あたいはお父っあんに似なくてよかった。そいでね、お母っあんからは女の子の色気を教わったのよ。こんな女でお偉いお家で行儀見習いが出来ませぬか」

「大丈夫よ。上様はお公家さん出身者にはない町娘の愛嬌を望んでおられるの。それにここん所のいろんな出来事から、お気を紛らわすにはお芳さんのような若い子と気楽に話せるのを楽しみにされているのよ。万事、私に任せてね」

「お須賀さんにそこまで言われれば、お芳は幸せもんです。ありがとうございます。くれぐれもよろしくお願えます。お芳、いいな、すっかり奉公するんだぜ」

「あいよ。お父つぁんの周りにいる俱利伽羅紋のお兄さん方ともおサラバね。お父つぁんは仕事でここへは来てもいいけど、お父つぁん顔しないでね。あたいはお須賀さんの配下に入ったんだから、承知しておいてよ」

こんな性格のお芳なので、お須賀さんにも遠慮なく一橋家のことを聞き出す。まずは指導係のお須賀さんにはこんなことを言った。

「お須賀さんと上様の関係って、どうなっているの。あたいは怪しいと睨んだけど、どうなの」

「ホッホホ、随分あけすけに訊くわね。そこがお芳さんのいいところね。私もね、お芳さんくらいの若い時があったのよ、上様の傍にいたのだから、何をされても文句は言えないわ。まあ、一度や二度はお傍に仕えたわ。でもね、年上の女はお好みでないみたいでね。それで家事全般を担当するようになって、色気よりも算盤勘定が中心になってしまっただけ。今や側女ではなく女中頭。いわば上様のお母さん役みたいものよ。それだけにどなたか若くて気楽にお傍にいられる女性をお世話しなくてはと探していたのよ」

「でも、私なんかより徳信院様にご関心があるって聞いてきたわ」

「そうね、私がお仕えする前の話だけど、上様は十一歳の時に一橋家に養子に入られたのよ。直子徳信院様は二代前の一橋慶寿様の未亡人なの。祖母に当るのだけれど、何しろ一橋家は代々世継ぎが若死にされていたので、祖母といっても当時は十八歳よ。七歳違いの可愛い弟という感じで接しておられたですよ。だからその後も仲がいいのよ」

「おもしろい繋がりね。確かに徳信院様は魅力的だもんね」

「それはね、上様の母上富美宮吉子様と同じように京都の宮家出身なので、いつも身綺麗にされているからね。上様は宮家への憧れと母性愛を求める気持ちもあつたのかもしれないわ」

「ははくん、判った。だから正室の美賀子様も京都の宮家から貰われたのね。しかも二歳年上だとか。でも、その割には上手くいってないのは、どうして」  
「やっぱり、お芳さんにもそう見えるのね。来てまだ一週間しかいないのによ

く気付いたのね。いい勘しているわ」

「そりやそうよ、あたいは町娘。人の噂話が生き甲斐なもの」

「お芳さんが気付いたように、上様は徳信院様と謡曲や遊びごとを今もされておられ、正室の美賀子様はないがしろにされたと思われ、嫉妬に狂われたことがあったわ。でもね、お子様が出来たので、これで目出度し目出度し、と誰もが思ったのだけれど、僅か四日の命だったのよ。それから口も利かないような今の状態になってしまったの。それだけにこれからのお芳さんの役割は大きいということよ。解ってね」

「じゃあ、そろそろお母っあん仕込みの色気で、上様に近づくかな」

「そうね、明日にでも桜を愛でる催しをして、上様がお芳さんに気付くようにしてみましよう。何だか楽しくなりそうね」

「あたいと喋って、びっくりする上様を見るのが楽しみだわ」

春の夜桜をお庭で見る宴が始まり、一橋家の主従が揃って顔を出していた。

しかし、正室美賀子さんは現れず、上様は徳信院様と語らっておられた。

ふと、周りを見てみると見慣れない女がいるのにお気づきになった。

「見かけない顔だが、そちの名は」

「あたいはお芳よ。行儀見習いに来てるんだけど、なかなか上手くいかなくって困ってるの」

「おお、町言葉が生き生きしておるな。元気そうで何よりじゃ。誰について習っておるのか」

「お須賀さん。でも覚えが悪いので、お須賀さんも手を焼いておられるようなの」

「須賀、こちらへ」

「ハイ」

「このお芳はお前の所にいるのか」

「ハイ、来て一週間ほどになります。まだ十分な教えはできておりません。何か失礼がありましたでしょうか」

「いやいや、話し言葉が町言葉で楽しい子だな。どうか、公家だとか武家だとかの躰や言葉遣いは教えないで欲しい。この天真爛漫さがいい。それに当家の女にはないさっぱりした気性が漂っているな。町人はこんな感じで話しているんだな。羨ましい。実に楽しいじゃないか」

状況を観ていた用人黒川嘉兵衛がお須賀のもとに寄ってきた。

「お須賀さん、大丈夫ですか。上様のお命を狙う者は新門辰五郎に警備をして

貰っています、もう一方では上様に近づく女にも注意しないといけません。気を許した女に毒を盛られることもありますのでね。お芳さんの出はどうなのですか」

「これは、これは申し訳ありません。事前に黒川様にお伝えせず、お芳を上様に近づけてしまいました。実は、お芳は警備を担当している辰五郎の娘なのです」

「エエ、辰五郎の娘。間違いありませんか」

「先日、辰五郎が直接連れて来たんですよ」

「どうして、辰五郎の娘があれほどの美人なのですかね。いやいや、これは参った、参った。酒の酔いも醒めるといふものですね」

「最近いろいろと難儀の多い上様のお気を紛らわすには、上様の知らない、接することのない町娘を近づけようと考えたの」

「さすがはお須賀さんだ。上様も喜ばれるでしょうな」

「万事、上手く運ぶようにいたしますからね。ご安心ください」

「よろしく願います」

「さて、お芳さん。今夜は頼みますよ」

「あいよ、上様だって町の男衆と変わる所はないのでしょう」

「そうね、私は町衆を知らないけれど、同じつもりでいいわよ。但し、少し儀式ばった所があるわよ。それは私が傍にいて教えるから安心しておくれ」

須賀は、その後を上様の傍に行き、耳元で囁いた。

「今夜、お芳をお伴させます。なお、近頃の町娘ですのでおきよではないかもしれません。その点はお許してください」

「まあいい。そういえば、お前はおきよだったな。ハッハハ」

「いやですね、今さら何をおっしゃるのですか」

「おきよでないお芳に、町衆のやり方を教えて貰えると思うと楽しみが倍加するのう」

「はい、大いにお楽しみ下さい」

上様を湯殿に案内した後、須賀は、お芳に肌襦袢とお腰という姿で、湯殿の前に控えさせた。

「お芳にお背中をお流しさせていただきます」

「ウン、入れ」

お芳が湯殿に入るのを見届けて、須賀は傍の廊下で控えた。

「上様、失礼します。お背中を流させて頂きます」

「オイオイ、町言葉でいいぞ」

「じゃあ、上様、背中を流しますから湯殿から出て下され。あれ、思った以上に筋肉隆々ですね。もつとか細い背中だと思つてました」

「知らなかったのか。剣術も弓矢もやつておる故だ。どうだ、手で触れてもいいぞ」

「ハイ、それにもつと隆々とした物がありますね。こちらも触りましょうか」

「いいや、これは後のお楽しみにしておこう。いやはや、お芳は面白いの」

湯の音と共に笑い声が聞こえてくるのに、須賀は安心した。

「あがるぞ」

「ハイ、ただいま」

上様は心地よさそうなお顔で寝室に戻られた。お芳を別の風呂に入らせ、身を清めて、下着と寝衣に着替えさせ、念のため害を与えるものを所持してないかの改めも行った。

須賀は、上様の寝室にお芳を連れてゆき、この後は控えの間で一睡もせず二人の交わりとその後のお休み状況を窺っていた。

「お来たか」

「はい、お傍に伺います」

「よしよし、先程の物に触れてもいいぞ」

「握りますよ」

「ウン」

「お元氣ですね」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「さて、そろそろよいかな」

「痛い、痛いですよ。お願い、もつと優しく」

須賀は意外な声を聞いて驚いた。お芳はおきよの振りをする術まで持つているのか。大した町娘だと感心していた。

翌日、下女が寝床を整理して報告に来た。

「ご覧ください」と、昨夜に使われた不浄紙を見せられた。

「おお、血の染みではないか。お芳はてつきり済ませているものと思つていたが、おきよだったのか」

須賀は嬉しかった。上様はもつと嬉しかったに違いないと思つた。その後は連日、お芳が寝室に伺う日が続いた。上様はおきよだったお芳が忘れられない

ようだ。

文久二年（1862年）、慶喜は接客・文通の禁止も解かれ、幕府より將軍の後見職を命ぜられ、十二月には上京し、孝明天皇に謁見することになった。一橋家は俄かに忙しくなった。とりわけ、女中衆をどうするかであった。お須賀は一橋家に残り、正室美賀子様と留守居をする必要があった。大方の女中、下女は京都で手配すればいいが、側女だけは上様の意向を聞かねばならない。

「上様、上京に際し側女はいかがいたしましたでしょうか」

「訊くまでもないではないか。お芳を連れて行く。お芳と話していると、嫌なことがすっかり忘れられるのだ。それに須賀の見立てとは違い、我に女を捧げてくれたのは何にも増して嬉しいことだ。是非ともお芳から世継ぎを生ませたいと考えている」

慶喜はあの夜のお芳がおきよであつたことが嬉しくて、あれ以来、夜伽はお芳と決めていた。慶喜は大奥のような女を取っ換え引換えするようなやり方は好まず、愛する人物を絞ぼり、溺愛する感じであつた。

世情が何かと騒がしい。生麦事件（1862年）、長州藩の英・仏・蘭の砲撃事件（1863年）、薩英戦争（1863年）、更に翌1864年には、天狗党の乱、池田屋騒動、禁門の変、長州征伐等が立て続けに起こつた。

そんな中、慶喜は元治元年（1864年）三月に禁裏御守衛総督に任じられた。その役割は京都御所を警護することであるが、一橋家には本邸を守るにも辰五郎の世話になっており、もはや人の派遣は出来そうにない。それではと黒川嘉兵衛は辰五郎に一橋家お抱えの火消し隊として、京に行つて貰えないかと要請した。すでに京都の小浜藩邸に上様と住まいしている娘のお芳に会える喜びもあり、また、永年お世話になっている一橋家の依頼とならば、男辰五郎、六十四歳の最後の華にしようとの思いで快諾した。子分二百名を連れて上洛したのだ。

京に来てからの慶喜は次から次に押し寄せる問題の対応に苦慮していた。そんな中での救いは、京都での本拠としていた小浜藩邸屋敷での寛ぎだった。二条城から戻ると、お芳が気楽な町言葉で出迎えてくれることに喜びを感じていた。

「お帰んなさい。疲れたでしょ。美味しいお菓子を見つけたの。いっしょに食



べましようよ」

形式張らない出迎えに、公家衆や幕府役人との折衝とは異次元の世界に入れた心地良さを感じていた。

「じゃあ、次は花札で遊びましようよ」

「随分負けがこんで、お芳への支払いが溜っているな。お手柔らかに頼むよ」  
「上様、勝負事は強気でやらないとダメよ。今までの負けを一気に取り返すことを狙わなくちゃネ」

お芳に教えられた花札遊びに興ずる日が多くなり、その度に負かされている己に不甲斐なさと同時に、夢中になるものがある幸せも感じていた。

夜は決まってお芳であった。京都でも側女を当てがわれたが断っていた。お芳の自由気ままな振る舞いが、毎夜、新鮮であった。時には慶喜を馬に見立てて、お芳が背に乗ってくる。

「行け！行け！攻めるのダ！」と、手むちで尻をビチビチと叩く。

慶喜としては、人に叩かれるなんてことは初めての経験で、何だかうれしく、馬となってお芳の命令に喜んで従っていた。

目に余るお芳の言動に用人が注意をするのだが、  
「あたいは上様の求め通り町言葉のままに従ってるだけよ。なんなら訊いてみれば…」と、相手にしない。

「上様、今は政事等ご多忙の折でございますので、何かと熟慮される時間も必要でしょう。ご迷惑かと存じますので、暫くお芳を離しましょうか」

「何を言う。御所や二条城で神経をすり減らしているのに、息つく間もなくここでも頭を働かせよというのか。そんなことをすれば、身体も心も持たないゾ。お芳との戯れ事が唯一の息抜きなのだ。余計な口出しをするな」

慶喜は毎日でもお芳と過ごしたかったが、実際にはいろんな人物が訪ねてきた。世界の情報やフランス語を教えに西周や、職務の手助けをしている小笠原長幸。それに慶喜の信頼の厚い一橋家の重臣である黒川嘉兵衛、原市之進、平岡四郎らが翌日の政事についての打ち合せにきた。

慶喜が恐れを抱いたのは、信頼している部下の平岡四郎が水戸藩の攘夷派の襲撃を受け、殺されたことだ(1864年)。さらに原市之進も自宅を訪ねてきた幕臣二人に首をはねられた(1867年)。いずれも慶喜の身代わりか、脅しを意図しているように思えた。

その恐怖を紛らわすには、お芳と戯れるしかなかった。

世の中が騒がしくなっているが、慶喜は公武合体でこの難局を乗り切るべく、孝明天皇との信頼関係を築いていた。そんな折、十四代将軍家茂が慶応二年（1866年）七月に没した。僅か二十一歳である。世継ぎの子がいらないことから後継者としては、慶喜の他には誰ひとり存在しない状況であった。しかし、前回の後継争いの後遺症もあり、慶喜は頑なに断り続けた。それでは家茂の死を公表できないと説得され八月になって、徳川宗家を相続することは納得するも、将軍職は固辞した。その後、孝明天皇に強く請われて、十二月五日に征夷大将軍に任じられた。

ところが、肝心かなめの信頼関係を築いていた孝明天皇が同月二十五日に何の前触れもなく急死されたのだ。三十五歳の若さで、すこぶる健康だっただけに不思議な死だった。この死は公武合体に反対する勢力により、毒を盛られての暗殺ではないかとの説が流れていた。

最早これまでと考え、慶喜は慶応三年（1867年）十月に大政奉還、将軍職を辞した。

京では、水戸藩士住谷虎之助に原市之進、尊王派では坂本竜馬、中岡慎太郎らが慶応三年に暗殺されているだけに、慶喜はお芳に時として弱気な発言をするようになっていた。

「フランス公使ロッシュに頼んで、お前と二人でフランスへ逃れるか」

「あたいは嫌です。上様はフランス語を習っておられるようですが、あたいは江戸っ子。フランスなんてとんでもない。それなら江戸に返して下さいな」

「そうだな、京にいる薩摩や土佐、長州の者どもに攻められ、追い詰められて、江戸に帰らざるを得ないかもしれない。但し、命があればだが……」

「あたいは死にたくないよ。お父っあんが上様を守っているんだから、大丈夫よ。辰五郎と聞いただけで敵は逃げ出すんだから」

「そうだといいのだが、ここは江戸じゃないから、辰五郎の名は轟渡っている訳ではないだろう」

「いいえ、お侍さんの世界では知られていないでしょうが、侠客の世界じゃお父っあんを知らなくちゃ生きていけないはずよ」

「そうか、安心していいんだな。じゃあ、安心ついでに桃源の世界に連れて行ってくれ。もうそれしかない」

「はいよ、任して。嫌なことはみんな忘れて、お芳の身体だけを見つめて、好きなどころを触っても、舐めてもいいよ。あたいも触りまくるよ」

將軍を辞したにもかかわらず、王政復古を狙う旧幕府や会津・桑名藩の重臣は慶喜に挙兵するよう迫ってきた。やむなく京都攻めを試みたが、淀藩の裏切りにより、鳥羽・伏見の戦いは大敗し、大坂城に引き上げてきた。戦力的には幕府軍が優勢であり、慶喜が出兵すれば士気も高まると言われ、

「これより打ち立つべし、皆々その用意すべし」と命じた。

その一方で、慶喜自身は時の流れから敗戦を察知しており、江戸に戻り、再起の態勢を整えようか、いやいや、新政府軍の力が強まれば江戸に戻った上で、恭順謹慎をすべきか、と悩んでいた。いずれにせよ大坂城を脱して江戸に戻るべきだと決断した。

一月六日の夜、誰にも気づかれずに、会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬、老中酒井忠惇、老中板倉勝静、外国奉行平山敬忠、大目付戸川忠愛、若年寄浅野氏裕、目付榎本道章、医師戸塚文海の計九名に江戸への同行を命じた。

「上様、それは戦おうとしている味方への裏切りになります。再度、お考え直し下され」

「考えがあるのだ。命令に従え！」

九名への命令だけではなかった。側用人室賀伊豆守には事前にお芳ら奥向きの人間数名を連れて、開陽丸に来るよう指示していた。

「上様、別れるのですか」

「いや、すぐに会える。手配は辰五郎に依頼してある。先日の話に出ていた地元の侠客を通して、お芳は私のいる場所に届けて貰うようになっていく。安心しろ」

急を知った辰五郎はお芳らの手配をした後、慶喜の脱出道中に付かず離れず見守っていた。突然、若年寄の浅野様が辰五郎の傍に来た。

「辰五郎、すまないが大坂城に戻って欲しい。余りにも急いで脱出したことと、目立っては拙いとの判断で重要なものを置いてきた」

「何でございますか」

『金扇馬標』だ」

「ええ、徳川宗家の証しとされているものじゃございませんか。こりや一大事だ」

「頼んだぞ。誰にも気づかれずに江戸まで運んでくれ」

「お任せくださいませ」

「上様からは『お芳は責任を持って江戸に帰す』との伝言だ」

「ご依頼のあったお武家さま共々お芳は、大坂の港を取り仕切っている者に、

明日中に開陽丸に届ける手筈でございます。くれぐれもよろしくお願いいたします」

とにかく逃げることへの手配は抜群で、艦長榎本武揚の居ないにもかかわらず副艦長を艦長代理に任命して、江戸へ向かわせた。もちろん、お芳も合流していた。

「脱走なんて初めて。面白かったわ。お父っあんの力って凄いな」

「辰五郎には本当に世話になった。船中ではやることもないし、江戸に着くまでゆっくりと過ごせ」

慶喜とお芳は船中でこんな話をしていた。

「お芳よ、多分、我は死罪になるかもしれない」

「それはないでしょ。何といっても二百年以上も続いた徳川様だもんね。大切にされるわよ」

「それは何とも言えない。それだけに気になるのは、お芳、お前のことだ」

「あたいは今まで考えられない程のいい思いをさせて貰った。やや子が出来なかったのが残念だけど、それだけに身軽でもあるわ」

「では、江戸に戻ったらどうする」

「上様のような人といつまでも一緒に居るのはもう無理よ。やはり身分が違うもの。取り敢えずはお父っあんの所に戻って、これからのことを相談するよ」

「そうか、そうしてくれ。それなら安心できる。今まで本当にありがとう。よく尽くしてくれた。感謝している」

片や、七日の朝、大坂城内は大騒ぎになっていた。多くは我々を置いたまま逃亡した卑怯な慶喜への怒りであったが、同時に主の居なくなつた大坂城に止まつておれば薩長軍に攻められるとの思いで、われ先に脱走して行つた。空になつた大坂城は長州藩が支配した。

その後、朝廷から慶喜追討令が出された。慶喜一行は十一日に江戸城に戻つたが、薩長を中心とした皇軍の勢いは強く、もはや慶喜の戦闘意欲は萎えており、主戦論を唱える小栗忠順らを罷免し、恭順を決めた。

自らは上野寛永寺に移り、謹慎・閉居した。

お芳は江戸に戻ると、浅草の自宅で過ごしていた。そんな時に水戸藩の小石川屋敷にいるお須賀から、顔を見たいので来るようにとの連絡が入つた。

「おお、よく戻ってきたのう。御苦労様だった。元気そうで何よりじゃ」

「はい、上様のお蔭で江戸に戻れて、今は元気そのもの。あたいのことより心配は上様だわ」

「うん、皆が助命に動いていると聞いております。お聞き入れ下さるといいのですが…」

「大丈夫ですよ。お父っあんが言っていましたよ。戦うことを止められて恭順の意志を示され、謹慎もされているのですから」

「そうあつて欲しいわね。さて、お芳さんはこれからどうしますか」

「その前にお願いがあつた。上様は許されるに決まってるから、お須賀さんはそのあとのことを考えて欲しいの」

「はて？何を」

「上様は京都、大坂の時はあたいだけだったの。世の中が乱れていても、夜のお勤めは元気そのものでね。それだけに、わたいが居なくなるとお困りだと思ふの。今は謹慎中でも、謹慎がとれたときはどうされるかしら」

「・・・」

「上様は口には出されなかつたけど、お子が欲しいようヨ。あたいもそれなりに努力したのに、縁がなかつたんですかね。そこで次の側室は安産型のお尻の大きい方を選ばれるといいと思うの。」

「ホッホホ。お芳さんらしいわね。上様が死罪になるかも知れない緊迫した中で、私の心を和ませてくれて、ありがとう。そうするわね」

「もう一つお願い。側室は二人がいいよ」

「どうしてなの」

「あたい一人で、毎日だったのよ。さすがにこれはこれで大変だったわ。二人なら交代でお相手できるもの」

「ホッホホ、毎夜でお疲れだったのね。お芳さんの考えを参考に選んでみるわ」

「良かった…」

「それで、お芳さんはどうするの」

「上様には内緒よ。実は行儀見習いに出る前に、あたいを好いてくれた男が居たの。てつきり、所帯を持っていると諦めていたところ、あたいの戻るのを待たせてくれたのよ。いい男でしょう。吾郎っていうのよ。今はその間の埋め合わせで毎日会ってるの」

「あら！いい話だこと。辰五郎さんも喜ぶでしょうね」

「そうはいかないわ。吾郎はお父っあんの手下なもんで、『手下から選ぶんなら俺に任せろ。将来性のある奴がいっぱい居るからな。吾郎？あいつはダメ吾郎だゾ』と言われているんです」

「ダメといわれて言うことを聞くようなお芳さんではないのにね」

「この話は上様にも、お父っあんにも内緒、内緒でお願いします」

「分ったわ」

「じゃ、お須賀さん、お元気だね」

「ありがとう。お芳さんも幸せにね」

その後、慶喜は死一等を減ぜられ、水戸に移り、七月には駿府にて謹慎を続けた。

お芳は吾郎と所帯を持つことは、とうてい辰五郎の了解が得られないと察し、辰五郎が護衛として水戸に行っている間に、少し頼りなさもあるとはいえ、優男の吾郎と駆け落ちした。行先は越後の小京都といわれる加茂だ。どうしてここを選んだかといえ、京都の賀茂神社の社領であり、恐れ多くてお父っあんも遠慮して来ないものと思っていた。

ところが、越後の侠客で、昔はお父っあんの世話になった藤三郎が訪ねてきた。

「お芳さん、親父さんが心配なさってますぜ。ここはわっしの顔を立ててお戻りください。わっしも若いもんの気持ちは解りますんで、親父さんを説得しますから、安心しておくんなさいよ」

「ホントに説得できるの。なんせお父っあんは頑固者よ」

「吾郎さんよ、せっかく江戸で修業してんだから、こんな田舎じゃもつたないじゃないか。いっしょに帰んなよ。悪いようにはしないからな」

「親父さんのおっしゃる通りに致します」

こんなことがあって、お芳と吾郎は浅草に戻った。

「お芳、あんまり心配させるなよ。藤三郎の言うことももつともなんで、一つだけ約束してくれば夫婦として認めよう」

「お父っあん、約束って何なのよ」

「お前が惚れた吾郎は、皆からダメ吾郎と言われてんだ。お前の力で吾郎のダメ部分を直せるって約束できるか」

「なに、簡単なことよ。直す直さないもないもんだ。吾郎は加茂で生きる手立てを学んでいたんだから、今じゃお父っあんの知っている吾郎とは違ってるわよ。それはすぐに判るよ。なあ、吾郎」

「親父さん、勝手な真似をしましてすみません。何とか親父さんの了解を得たいと思んですが、先ずは一人前になって、成功した暁に認めて頂こうと思ひ、

何も知らないところで修業してきました」

「そうなのよ。今回のことは吾郎じゃなく、全てわたいから駆け落ち話を強引に持ち出したんよ。吾郎の所為じゃないからね」

「解った。くどくは言うまい。吾郎の成長振りを見てから祝言を上げることにするか」

「ありがとう。お父っあん。実はもうお腹にやや子がいるのよ」

「そうか、孫という訳か。嬉しいじゃないか。上様にもいいみやげ話が出る」

「あれ、父っあん、上様の所に行くの」

「そりやそうだろう。駿府の殿様になられることが決まったんじゃ。それに伴って、かつては旗本と威張っていた連中も江戸を追われ、食いつ持もなく、共に駿府に行かざるを得ない者が大勢いる。中には上様を恨んでいる連中もあり、その御守りは俺しかできないだろうが。上様のたつてのお願いを聞かないでどうする」

「浅草はどうするの？」

「大丈夫さ。京にいる時も留守していたが、音吉をはじめ、皆で門前辰五郎の領域は拡大することはあっても減るっていうことはなかった。俺も間もなく六十八歳だ。最後まで上様のご奉公で終わりたいのさ」

\*

\*

\*

「大島芳子さん、目覚めたかしら。こんな事情で谷中の墓地にはわたいの墓はないのよ。お須賀さんは私の言ったことを聞いてくださり、駿府での側室は新村信さんと、中根幸さんになったのよ。二人ともお尻が大きかったのかしら、お子様も二人合せて二十一人も産んだそうよ。お須賀さん共々、生涯を慶喜様に尽くされたんで、谷中の墓地に一緒に眠られているのよ。」

「あたいは町娘で、ダメ吾郎に尽くしたって訳よ。あんたもいい男に惚れられると楽しいよ。じゃ、お別れね」

大島芳子は眠たい目をこすりながら、歴女になると思わぬことが起こるんだと思った。これからも歴史を学び、さらに楽しもう。

次はだれに変身できるかな。

完